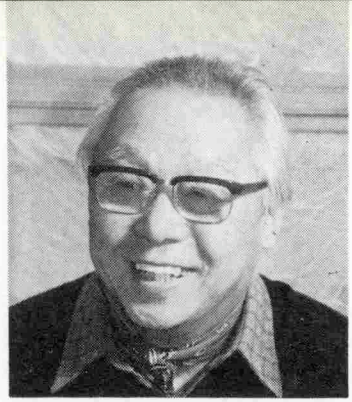
●第13回神戸文学賞選考座談会

# 神戸文学賞／第二の近松になれる可能性

## 門田（もんでん）露（つゆ）「お夏」

本誌が創刊15周年を記念して設定しました「神戸文学賞」。第13回目を迎える本年、北は北海道から南は沖縄まで全国から多数の応募作が寄せられました。基礎選考の結果、「鳴き砂の浜」（畑　裕子）、「黒き砂嵐」（湊　令子）、「スイート・メモリーズ」（矢部由香里）、「インディアナの長い影」（弓透子）、「朝のモナド」（本吉洋子）、「たわごと」（長門郊美）、「お夏」（門田　露）の7篇が受賞候補作として残りました。



杜山　悠さん<作家>

●選考委員

★レベルの高い候補作が並んだ

A　今年はなかなか質のいいのが出て来ましたね。

B　期せずして女性ばかりの候補作となってしまいましたが。

C　確かにレベルが年々高くなって来ていますね。

A　まず**矢部由香里**の「**スイート・メモリーズ**」。非常にしっかりした書き方なんですけれどもねえ、実際にはしゃべれない、使えない会話がでてくるんですよ。

B　会話に不自然さと生硬さが残る。

A　それが読んでいて最後まで気になるんですよね、将来書ける人だとは思うんだけれども。

C　**本吉洋子**の「**朝のモナド**」はどうでしょう。現実的な描写なんかは一応できてるんですが…

A　この頃こういう文学によくぶつかるんですよ、〝おしゃべり文学〟というか、〝饒舌文学〟に。気のきいたコトバに見える文章が息つく間もないほど続くのには驚きました。感性のよい人だとも思うんですが、「気どった文章」といったら作者に失礼ですが、やはり作品が浮き上がっている感じがしました。だから、もっとドカッと地についた書き方ができないかなと思いますね。「そういうふうに感じて生きてるのかなあ」とも思ったり、「書く時にこういうふうな感じ方で書いてしまうのかなあ」と思ったりね。

B　しかし、このしゃべりには哲学的なものを感じるんですが。

C　〝神戸っ子〟としてはピタッとくる所があるかもしれませんね。でも、やはり焦点がわからない。

A　**畑裕子**の「**鳴き砂の浜**」は短歌をまじえた静かな、静寂な感じの作品でした。ちょっと気品もあるし、小ぎれいにまとまってもいるし、心理のひだもよくとらえた作品なんですが…なんで退屈なんでしょう。

B　平凡すぎるんですよ。

C　引きずり込まれることがないんですよねえ。静かな情景の中で

鄭　承博さん<作家>

武田　芳一さん<作家>

女の性を描こうとするのはよくわかるんですが、やはり退屈さがぬぐいきれない。

B　しかし、どの作品もよく〝神戸っ子〟むきにして来ていますね。

A　よく研究してますよ、〝神戸っ子スタイル〟を。

A　さて、次に**湊令子**の「**黒き砂嵐**」、これは一言でいって整理不足ですね。

B　説明がついてないんです。とてもわかりにくい。何かくい違っている。

C　もう少し整理がついてればねえ…　残念ですね。

A　「**インディアナの長い影**」、**弓透子**の。これが僕にはよくわからなかったんですが。

B　いや、僕はよくわかりましたけどねえ。非常に訴えてくるものがありました。いい作品だと思いましたね。

A　17歳の**長門郊美**の「**たわごと**」これにはびっくりしましたね。

C　僕もびっくりしました。

A　僕はこの作品を非常にかってるんですよ。

B　本当に17歳の女の子が書いたのかと思いましたね。

A　実に作者の「目」がいいんですよ、作品全体にみなぎる意欲も感じるし、たしかな背骨がある。

C　しかし、できすぎという感じがするんですが。

A　確かに〝感じ〟としては、どこからか引っぱり込んで来た感じもするんですよ。確証がないから〝感じ〟としか言えないけれども。ところが、それをうまくこなしきれてないですよね、もっと巧者ならばそれを跡かたもなく消しておいといて自分のものにできるんだけどもね。そのあたりに幼さを感じるんですが。

B　でも、よく書くね。きちんと説明がついてるし、度胸がいい。

A　構成そのものには古くささがあるのはよくないが、これから大きく伸びてくるだろうね。

A　**門田露**の「**お夏**」はどうですか

B　私ね、大好きな小説でした。有名な「お夏清十郎」物語だけど近松のものより実感がありました。

C　そういうふうに書いたんでしょうねえ。

A　時代小説を書く人はね、安逸にながれる危険性があるんですよ。おもしろければいい、と。でも、そうじゃない。社会性を持たせなければ、社会性を持った時代小説を書かなければ駄目ですよね。その意味でも晩年の「お夏」を描いたこの作品はとてもいいものができあがっている。

普通、資料をよく出したがるんですが、小説になる資料がいらないんですよね。換骨奪胎、資料を全部埋めてしまわないと。

B　その資料を出してこない所にこの作品のよさがあるんですよ。ま、いかにもリアルがある。

C　確かにレベルは達してますね推すとすればこれかも知れませんB　第一にねえ、肩肘を張ってないんですよ。お夏を書くとすると盛り込みたくなる事柄がいっぱいあるんだから、どこかにきな臭いものがでてきそうなもんだけど、それが全然でて来ない。

A　で、どうでしょう。僕は「お

夏」を入選にしたらどうかと思うんですが。

B　そうですね。いいと思いますね。

C　まあ、いくら有名な作品だと言っても、浄瑠璃とはまた違った見方ができますものね。

A　西鶴には全然おんぶしてない。これがいい。

B　西鶴のもリアルな作品なんですが、これも現代的なリアルがある作品ですよね。

C　女性らしい木目の細かさもいきていますし、この技術は認めてやらねばならないでしょうね。

A　じゃ、入選は「お夏」で決定ですね。

B　佳作についてはどうでしょう。僕は「インディアナの長い影」はどうかと思うんですが。でも長門郊美の「たわごと」も無視できない。

A　結局、作品は未完成だけれども将来があるという採り方をするのかどうかが問題となってくる。

C　17歳。高校二年生ですか、この若さですごいですねえ。

A　長崎の子でしょう。九州という所はは文学の層が厚いんですよ

B　でも、どうでしょう。この子は将来も大いに期待できることですし、今回は現代感覚の勝れた「インディアナの長い影」を佳作ということにしたら…

C　長門には『もういっぺん来年に来い』ということにしましょうか。

A　門田露も二回めなんですよね一回めはまだ作品が若かった、ということですね。それで発奮したのかどうかはわかりませんが、かなり努力したんでしょうね。

C　いや、努力したんだと思いますよ。でないと、あの「お夏」は書けませんねえ。

B　「インディアナの長い影」もいい作品ですよ。アメリカ人と日本人の感覚の違いが強烈に出てましたよ。

C　〝神戸っ子〟のカラーを考えると、この作品はいいかも知れませんね。

A　でもどうしても「たわごと」がひっかかってくる。

C　あまりにも大人っぽすぎるからねえ。

A　いや、幼稚な部分がないこともないんですが、ついてくるいろんな付随物に大人の目がでてくるもんだから、これはどうなってるのかなあという気はしましたね。

B　結局、自分の言葉で書いてないんじゃないかという気もしますねえ。

C　まあ、入賞には時代ものの「お夏」をとったんだから、佳作には現代ものがいいかも知れませんね

A　そうですね。長門郊美の「たわごと」については、〝ぜひとも次作に期待する〟ということで、今回の佳作は弓透子の「インディアナの長い影」に決めましょうか。

B　じゃあ、本年の神戸文学賞は門田露の「お夏」、佳作が弓透子の「インディアナの長い影」で決定ですね。

---

A　どうでしょう、一つ提案があるんですよ。来年あたりから、この神戸文学賞の受賞者と或いは佳作の作者にも、選考会に加わっていただいたらと思うんですよ。

B　それはいいかも知れませんね。年々、若い人の作品が増えて来ていますしね。

C　その人たちにオブザーバーとして加わっていただくといいですね。

A　そうです。やはり若い人たちの意見をどんどん取り入れてゆかなければと思うんですよ。

B　そのためにも、神戸っ子の文学的土壌を常に幅の広いものにしておく必要がありますね。

C　神戸っ子スタイルというものを一つに決め込んでしまわずに、多彩なカラーをもたせておくことが大切ですね。

A　ま、来年は今年の入賞・佳作のお二人を交て選考を進めてみたいですね。

（12・14、栄弥にて）

□第14回

# 神戸文学賞作品募集

本誌は昭和51年に創刊15周年記念として神戸文学賞・神戸女流文学賞を創設いたしました。これまで左記の通りに各賞の受賞作が決定しておりますが、第11回の募集より、さらに質の向上をはかるため「神戸文学賞」の名称に統一、受賞作を一作品として、現在、広く作品を募集いたしております。

- 第一回神戸文学賞「島之内ブルース」（田驛新＝尼崎市）同女流文学賞「ペットの背景」（小倉弘子＝大阪市）
- 第二回神戸文学賞「姥捨て」（奥野忠昭＝大阪府柏原市）「生活」（吉蜂正人＝神戸市）
（この回の神戸女流文学賞は該当なしで、神戸文学賞を二作が受賞）
- 第三回神戸文学賞「自由と正義の水たまり」（蒼竜一＝奈良市）同女流文学賞「夢の消滅」（大原由記子＝高知市）
- 第四回神戸文学賞「溶ける闇」（高木敏克＝神戸市）同女流文学賞「影と棲む」（田口佳子＝伊丹市）
- 第五回神戸文学賞＝該当作なし、同女流文学賞「痕跡」（久保田匡子＝大阪市）
- 第六回神戸文学賞「ガチャマン」（南禅満作＝神戸市）同女流文学賞＝該当作なし
- 第七回神戸文学賞「凶鳥の群」（徳留節＝京都市）同女流文学賞「花いちもんめ」（新光江＝鳥取市）
- 第八回神戸文学賞「昔の眠」（服部洋介＝神戸市）同女流文学賞「薔薇の跫音」（菊池佐紀＝愛媛県）
- 第九回神戸女流文学賞「ストラルプラグ」（桑井朋子＝高石市）「いちじく」（宇山翠＝北九州市）
（この回の神戸文学賞は該当なしで、神戸女流文学賞を二作が受賞）
- 第十回神戸文学賞「おどんナ海賊」（塚田照夫＝長崎市）「オレンジ色の闇」（舟木かな子＝神戸市）
- 第十一回神戸文学賞「瞬父記」（田能千世子＝茨木市）（この回より神戸文学賞と同女流文学賞を一本化）
- 第十二回神戸文学賞「夢食い魚のブルーグッドバイ」（釜谷かおる＝高砂市）
- 第十三回神戸文学賞「お夏」（門田露＝西宮市）

ここに第14回文学賞を公募するにあたり、多数の意欲的御投稿をお願いするとともに清新かつ強力な作品の出現を期待する次第です。

△募集要項▽

一、応募作品は小説とし、応募資格は問いません。ただし応募作品数は一篇に限ります。

一、応募作品は未発表原稿、または締切以前、一年未満に発行の同人誌に掲載したものに限ります。

一、原稿枚数は四百字詰70枚。

一、原稿には住所、本名、年齢、職業、略歴を明記し、四百字程度の作品梗概をつけて下さい。

一、締切りは八月三十一日(当日消印有効)

△選考委員▽杜山　悠・武田　芳一・鄭　承博

一、受賞作品発表は本誌一九九〇年新年号誌上で、同号より作品を掲載します。

一、原稿の返却、選考経過などに関する問い合わせには応じかねます。

一、受賞作品の著作権は本誌に属します。

一、受賞作品には副賞として賞金三拾万円が贈られます。

一、原稿の送り先、お問い合わせは、神戸市中央区東町一一三の一　大神ビル九階月刊神戸っ子「神戸文学賞係」まで。

電話〇七八―三三一―二二四六

主催／月刊神戸っ子

■第13回神戸文学賞受賞作品

連載小説〈1〉

# お夏

門田（もんでん）　露（つゆ）

絵／大橋　良三

1

播州路の六月は、もう真夏で、室津への細道を行くなつの足許から、草叢のほてりがわき立ってくる。

なつが、喘ぎながら坂を上り浄運寺にたどり着くと、門口に立っていた老僧が声をかけた。

「よう参られたな。はよう休みなされ」

山門下で一服しょうとしたなつの手をとり、本堂の階段に連れて行った。

「こう暑うなってしもうたら、巡礼もこたえますわいのう。番茶が冷えておりますけん、待っときなされ」

老僧は腰からぬき取った手拭で、首筋をこすりこすり庫裡へ入って行った。

「ありがたいことでおます」

本堂の日陰に入ってほっと一息いれたなつは、背中から笈摺をはずし菅笠をぬいだ。

薄くなった白髪を束ね直し、手甲を取り、胸もとをゆるめると、崖下の海から吹き上げてくる潮風が、ためらいもなく懐にすべりこんだ。

〈また、一年が経ってしもうた…〉

なつは、磯の香りを鼻先きにからめとるようにしながら、狭い境内のすぐ向こうに広がる播磨灘を見やった。

銀色に乱反射する光が、老いの身を、一瞬刺し通したが、日盛りを過ぎた波間には、翳が見えはじめている。

なつは、にじり寄って柱にもたれると心持ち面を上げ、目を閉じ顎の下の汗を拭った。

「遠いところから、来なされたかの？」

井戸で冷やした番茶を持って来た住持が、なつに勧めながら聞いた。

「備前の片上からでおます。姫路にまわって今朝、円教寺さんを発って来たんだす」

「ほう、それは女子の足で長旅じゃったの」

末成のような細い尖った顎を突き出して、うなづくと、よいとしょッと剽軽な掛声をかけて、なつの横に腰をおろした。

「年寄りのきままで、年に一遍だけのにわか詣りでおますのや」

「それは結構なことじゃ。わしは、去年からこの寺で厄介になっとりますがの」

なつは、住持の訛りをどこかで聞いたことがあるように思った。

「おじゅっさんは、讃岐あたりの出えどすか」

「わしには、出えなんてもんはあらせんがの。行きついたそこが出えじゃけん」

いかにも飄飄とした風情は、寺の外で会っていたら乞食坊主に見間違えていたかもしれない。

なつは、備前の片上のセミ坂で、旅人相手の茶店を営んで四十年、やっと糊口を凌いできた自分の身を思うと、老僧に妙に近しいものを感じた。

そう言えば、以前からここにいた住持は去年亡くなったはずだ。

ちょうど去年なつが巡礼に来た折、四十九日の法要が営まれていた。その後に入って来たのが、このどこか間のぬけた老僧であるらしい。

暑い日中、老体をあやしなだめて歩いて来たような幾十里かの旅の疲れが、ふと誰かにより掛りたいような心情を誘ったが、なつはそんな自分から体をかわすように背を起して周囲を見まわした。

「この浄運寺に、なんぞ縁がおありかの？」

「へえ。まあ」

とっさに説明がつかなかったが、住持の人柄につられて、なつ自身思いもかけない言葉が口をついて出た。

「わてが、二遍生れたとこでおますのや」

「二遍？」

住持が、とんきょうに、話すたびにスースーと音のする前歯の欠けた口を掌で押さえてヒーッと声をたてたので、なつも肩をすぼめた。

なつはすぐ、初対面の人に対して妙にふくみのある言い方をした自分に内心赤面したが、住持は、毛の薄くな

った木槌頭を揺ってほっほと笑い続けている。
「ほんまは、わて、昔この先で身投げしたことがおますのや」
なつは、庭の向こうの海に張り出した崖を指差して、挨拶でもするように言った。
「ほう」
住持は、少し驚いた表情を見せたが、それほど意にも介していない。
「いらんこと、言うてしまいましたなァ」
「なんの、なんの。心配にはおよばんわな。わしの耳はすがらんぽじゃけん」
そういって住持は、急に真顔になっておもむろに茶を引き寄せた。
茶椀を持った腕の衣を肘にたぐり寄せ、その褐色の筋ばった腕をぐいっと正面に持って来て、茶を啜った。剛直な仕種だ。
見るともなく見ていたなつは、視線を住持の上にくぎづけにした。
〈六兵衛さんに、似といでやなァ〉
そう思えば思うほど、茶を喫する仕種ばかりでなく、背恰好から話しぶり、前歯の欠け具合まで似ているように思われる。
なつは、懐しさに見とれていた。
六兵衛は、亡くなってもう三十年にもなるが、なつの命を助けた人である。
昨日、なつは室津に来る前、六兵衛が堂守りをしていた円教寺のある書写山に登って来た。
そこにある六兵衛さんの墓と、六兵衛が亡くなる前に、なつのために建てておいてくれた清十郎の墓に詣るためであった。
円教寺の山門横にある堂守小屋の住人は、すでに代変わりしていて、なつと六兵衛が十数年、そこで暮していたことを知る者はもういない。
「室津で生れて十まで育って、姫路へもらわれていき、十六の夏に気い狂うて、わてこの向こうの崖から身い投げたんだす」
なつは、一言一言区切って、忘れものでも思い出すようにいった。
いつの間にか、六兵衛さんと一緒にいるような気がしていた。
「そりゃあ、あんた、仏さんからえらい貰いもんなされたのよ」
住持は、理由はともあれ生きていることが大事やと、南無阿弥陀仏となつに向いて合掌した。
「はじめはなッ、大事な人を失うたんが暑い時期やったさかい、毎年その時分になると家にじっとしておれんと、憑かれたように縁の地を訪ね歩いたんだす。それがいつの間にやはや四十年にもなってしもうてなあ。この年になったらもう誰のための巡礼やわかりまへんけど。ただ風のように歩いとるだけでおます」
住持も大きくうなづいた。
その時、おかっぱ頭の少女が、山門を潜って来てぺこりと頭をさげた。
「おじゅっさん、こんにちわ」
「おお。おちょぼか、どがいにした?」
「すんまへん。今夜は、浜で迎山手えがいるさかい、誰れも来れまへんて」
赤い腰巻とたすき掛け姿は、置屋で働く小女のようだ。
なつは、住持の悠長なしゃべりぶりと、土地の娘らしい小女の話を耳に快く聞き流しながら海を眺めた。
夕凪ぎ前の、最後の働きだろうか、海鳥が空と海を一つにして群れ騒いでいる。
室津の港は、年を追うごとに賑わいを見せているようだ。
ここは、なつが生れた頃すでに、西国大名達の参勤交代の上り下りに利用されて賑わっていたが、今では「室津千軒」と呼ばれて、摂播五泊の一つになっている。
陸から海へ、海から陸へ、男たちは船の乗り降りのた

びに、ここで束の間の夢を紡いでゆくのだろうか、夢を貪欲に喰った花街が、来るたびに脹らんでいる。

何を想ったのか、二羽の海鳥が空を切ってなつの眼前を旋回して、ゆっくりと飛び立って行った。

白い娟やかな首筋が、室津の遊女の白い項を想わせる。

なつは、幼い頃母の「卯の葉」の細っそりとした項に、憧れとある種の恐れに似た強靭さを感じたことを脈絡もなく思い出した。

なつの母の卯の葉も、この室の津の遊女であった。

なつは、見知らぬ小女に自分の幼い頃の姿を重ねてみて、年とともにすっかり風化してしまったつもりの記憶の底に、まだ人並みの情意が動くのを知って苦笑した。

小女は、なつが笑いかけたのを見て軽く会釈し、片頬に可愛らしい笑くぼを作った。

「ほな、おちょぼだけでも来たらええがな」

わかっていて、ちょっとからかう住持に口を尖らせて

「姉さんたちが来られへんのに、うちかて来れへん。ほな、さいなら」

ことことと下駄を鳴らして踵をかえした。

「わしの馳草、忘れるんじゃないぞ—」

振り向いて、あかんべした小女を、住持がわが娘でも見るようにいとおしそうな表情で見送った。

「あした朝一番に、船問屋の讃岐屋の水おろしがあるそうじゃ」
住持は、なつにそういうと、今夜は楽しみじゃ、と大げさに喜んでみせて、目を細めて海を眺めるなつに気づいた。
「あれは、ちと邪魔じゃったかいのう」
庭先きの物干しにつるした墨染の衣や、猿股がくしゃくしゃのまま広げられて、風に舞っている。
「いいえ。ちいとも」
「そうかの。ほな…」
立ち上ったついでに住持は、物干しの下に植えてあった紫蘇を株ごと一抱え引きぬいてきた。
よく見れば、庭の莚いっぱいに塩漬けの梅が干してある。
もともと世帯を持たないのか、すでに連れ合いに先き立たれたのか、住持はやもめ暮しをしているようだ。
「浜の娘らは来れんちゅうし、今晩のこしらえはいらんようじゃし」
住持は、のん気に紫蘇の葉を千切り始めた。
芳香が、暑気をはらうようになつの鼻先きをかすめた。
「あんたもこの分じゃと、相生あたりで宿をとらにゃなるまいが、ここでよかったらお泊りなさるかの」
「へえ…おおきに」
なつは、この何十年、遍路には来ても室津で宿をとることはなかった。
今でも、町の中ほどに、清十郎の生家も残っているし、なつが母と暮した家もあったが、いつもわざわざ避けて通って来たのだ。
恋人の清十郎のように若い身空で不幸な死を享けるのは残酷この上もないが、掛け替えのない人を失ったまま一人で生きなければならなかったなつのその後は、もっと過酷であった。
なつは、室津を、仕合せだった時のまま、手つかずで残しておきたかったのだ。

勧められて、初めて宿をとることにしたのも、浄運寺が六兵衛さんに助けられた場所であり、この住持であったからこそであった。
なつは、うっすらと掃いたような乳色が次第に濃い茜に染まってゆく雲を見上げながら両手で胸を包み込んだ。
「わてにもなッ、十六の時、一緒に死んでもええ思うた人がおりましたんや」
住持は、紫蘇を摘む手を休めずに、ほうほうとうなづいた。
「九つも年上どしたけどなァ、ええ男でおました…」
住持が、ちょっと間を置いて、なつの方を見ずに茶々を入れた。
「わしのようかの。ほっほ」
「まあ、そんなとこでおまっしゃろか」
なつは、年寄り二人の枯れた笑いの余韻の中で、長い間背負ってきた重荷が、ほんの少しゆるむのを感じていた。
「露の降りんうちに、取り込んどかにゃなるまいて」
住持が、ゆっくりではあるが佗住いの夜待ち仕事を一つづつ片付けてゆくのを眼の当りにしながら、なつはじっとして、いつまでも暮れなずむ海を見ていた。
春と秋の彼岸には、浄運寺の西門の真正面の海に、太陽が沈むのだという。
どちらの彼岸にも間があったが、なつはその時、夕陽に赤く照らされた西方浄土を拝んでみたいと本気で思った。
海に沿って、西の方に視線を移した。
賀茂神社の石段下の常夜灯に、灯が入れられた。
ぼんやり点った灯の揺らぎは、そのまま五十年昔へのなつの心の揺らぎのようでもあった。
その夜なつは、海鳴りの音を聞きながら、遠い遠い昔に遊んだ。

（つづく）